

無題

野田

女は起って居た。
 男は仕事に
 ××××××
 月が欠け
 陽はノボリ
 様々な事を知ったよ。
 闘いなくして
 有りえない事を
 ××××××
 今日も
 空腹だけど
 肉体を武器に
 明日は
 ××××××どっちだろうネ

露宿

第3号

定価500円



表紙写真
文中写真
文中挿絵

野村 和幸
岡田 知子
Gさん

露宿ペン倶楽部のお知らせ

雑誌「露宿」は露宿ペン倶楽部という文芸サークルを母体につくられています。「露宿ペン倶楽部」は雑誌の書き手・読み手とをつなぐ場として月一回ペースで開かれているお茶会です。どなたでも参加できます。初めて今号を手にした方や、興味を持たれた方、色々な人生の話を聞きたいという方、様々な人と語りたいという方、どなたでも大歓迎です。「露宿」はまだ始まったばかり。日本初の路上文芸誌を作っていくこの一瞬一瞬を、ぜひ一緒に見てみませんか？

お茶・お菓子などの差し入れ、大歓迎です。

日程 11月13日(土) 午後1時 新宿区立中央公園ボケットパーク(北東角) 集合

11月27日(土) 上に同じ

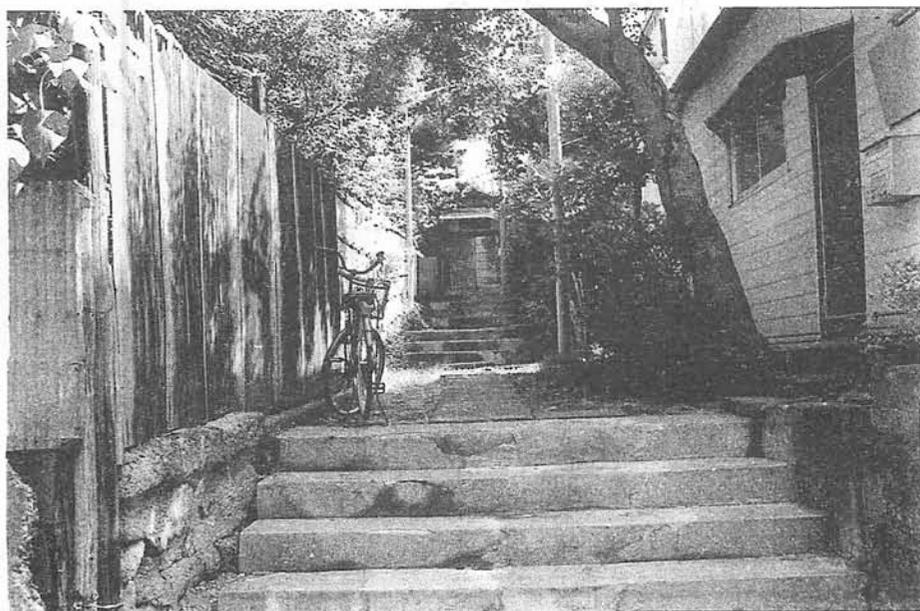
※雨天の場合は中止 ・連絡は090-3818-3450(笠井)まで

路上の旅

富士森 和行

箱庭の如き三崎の秋に来てこの萎縮せる海の俗化よ
はるばると白秋の碑を訪ねきしとある漁港の町寂びれたり
しろじろと水揚げしたる烏賊干すにこんな優し秋の陽が降る
激動の昭和ファシズムの半世紀耐えて路上の露凌ぎけり
新しき世代拭いきれぬまま昭和の翳り負ふ十字架のあり
小骨刺す感触残りしばらくは老いの夕餉の秋刀魚は焼かぬ
涯てしなき旅情の故の寂しさよ路上も然り秋に問ふ海
すきびたる生活の中に取り戻す言葉いくつか活きいきとして
路上の旅に繋る秋の海みれば支へられたる余生を想ふ

(一九九九・九中旬、三崎漁港辺詠)



理想と現実

自分の夢と逆に行き不思議な世界

自分の夢はお金持ちになりたいのに

貧乏で弱者になる世界

今日はあんな酒のむ、薄い日か肌寒い

陽加

99.5.2

魂のめぐり

寄せ場で長い宙だ暮

しているよ、なんだか魂が
うすくなってる、どうな気がする

やる気や無気力になっていく

ような感じ、夢も希望も

なくなってる、どうしたんだろうのか

自分でもわからないよ、なってる

1999

9.19

小一

神様 人生とわ何にか
生きるとわ何にか だれも知らない
だから世の中わ たのしい
ただ知って居るのわ 金ねだけだ
困まれば神様 助すけてよ
お金ねが入れば はいさよおなら
これじゃ 神様おこるわけ
いきづまり 首を吊って言う事わ
神も佛も 無い物のよと
言ってたびだつ 三づの川
どこまで行ても 同じ事
すごろく人生 終りなく

佛け様
しやわせとわ何にか 死ぬ事か
それとも一人で つくる事か
一人者にわ わからない
二人でつくる 者も居る
又た三人でつくる 者も居る
だが三人でつくて 一人わ泣きお見る
それでも楽しく 生きて居る
これが佛けの さとりかな
いやそうでわないだらう
生か死か お迎が来るまで
わからない 佛け様
さとりとやらお おしえてよ

なまけ者の なまあくび
かみてひるねで 暑つさしのぎ
これが親父の する事か
これじゃ女房 家でする
それを見て子も 家を出る
親父あわてて とびまわる
初めて知った
足があり また手もある
馬鹿な親父の 目がさめた
ゆめであつて よかつたよ

小一

盆くれば 想い走しらす ほたる灯か

貧乏人 暑つき知らずに 稼せぐだけ

残暑に お夏きよらん 秋が来た

鯉い心ろ ふをばむさぼる むなしさよ

枯れすすき 利根の河原で しじみとり

秋風に きびしい残暑も 吹き流す

十五夜か だんご酒のむ 月見草

平塚 悔吉

ながむれば 心の空に 雲の消え

一章

悩みの無い人の顔を見てみると こちらまでが
段々悩みが消えて行く気がする。

悩みを背負って苦しんでいる人を見ると ち
らも段々苦しく成って来る。

心をいつも さわやかにして 日々を過ごして
行ける人生をこれからは もちたいと思う。

二章

月の光を仰いでいる 雲がかかって見えなく
なる 雲が流れると 又 見えて来る その雲が
人間のみにくい貪欲なのだ

雲の様な 貧りの心を取り払うのが 生きると
いう云う事なのか 心に掛かる雲は出来る限り
取り払い度いと思ひ 一生懸命努力して生きて
行けたらと思う。真に生きるは大変だ。

雑句

(逆境と絶望の中暖かき真の友と接して)

鈴木正広

- 一、落葉無心に降るや タンボール住に チェホフを読む人あり
- 一、更衣して 瘦せしこと云はれ 我寂し
- 一、日曜日 薄夜の炊出し過ぎても 貧しきもの 貧しきなり
- 一、激しき雷雨 タンボールをたたき 我が心洗ひなをせ 此の
社会と共に
- 一、抗わず 極暑の人と ならんとす
- 一、虫群れている 外燈はタンボール住の 唯一つの光かな
- 一、故郷を想ひし 公園の夜 静かに曇りをり
- 一、雲映じ その雲紅し 公園に秋近し

付記

此の雑句は現実の厳しき重圧の中で、現に今日も明日も生きている
或る一人の、真実の心の闘ひの叫びである。そして僕の友人であり
仲間であることを誇りに思ふ。人の希望に通ずる一人、一人のつな
がりは、きつときつと大きな樹となり、風雨に耐える。そして大地
にぐつと根を下ろすであらう。

友 田代 猛

リサイクルショップ

アン

★電話注文 OK です◎

御一報下さい◎

★御希望の方には商品リスト
送付いたします。
(¥100円切手送ってね)

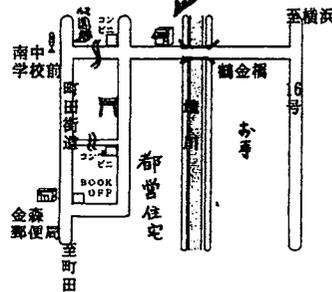


営業時間

12:00 ~ 午後7:00

* 小田原町田駅から バス停 ⑨ で 金森方面
に行くバス(とよみ)に乗って「南中学校前」で
下車。公園と 仁行堂クリニックの間の道を5分。

不用品高価買取!!
※買取販売も受け付け!!
・良いものが安く
手に入ります!!



〒228-0802
相模原市上鶴間4-2
嵐/嵐
042-740-5238
リサイクルショップアン

青春の想ひ出

(愛と云ふ言葉)

昭和二十年八月九日、学徒動員中、原爆のため長崎市浦上の地で遊ばし
長崎県立高女三年間野素さんに捧ぐ。

山口 尚

何も云はない。

何も云はないほうが、

ずっと言葉になつてゐたのさ。

君の瞳を想ひおこすたびに。

君の淋しい後ろ姿をふり返るたびに。

僕の心に 愛という言葉をおしえてくれた女。^{ひと}

過ぎ去りし幾十年の青春の想ひ出よ。

生きとし生ける敏七^{よわひ}十三年の今日の日の僕にでも

愛と云う字の美しさ重さを

心におぼえます。



TOKYOの 夢・現実

五林 修

赤い目をした消防士達が、焼け、ただれて、動かなくなった、消防車で走って行った。威勢のいい掛け声を上げ焼けただれた消防車を、引きづって行った。

火事もない、静かな夜明けを迎えた都で、彼等は、どうなってしまったんだ。

仲間が、目隠くしのヴェールを、はぎ取ろうと、必死にもがいている。強い力で塗り込まれたヴェールが、仲間の、肉眼を痛めつけている。

山の奥深い谷底から湧き出ている、あの、“水”を飲みさえすれば必ず痛みもやわらぐはずだ。

御山にテントを張って、

仕事を、するともなく、ブラブラ歩きを続けている。

あの人は、俺の兄貴なんだ。

突然、それまで勤とめ上げた会社の、社長を張り倒したそうだ。

弟の俺にさえ、手を上げなかつた兄貴が…。

「ぶったおされた社長様の鼻の骨が、ちぎれて切れた。」と聞いた。その場を見た同僚の彼が、言っていた。

いいさ、兄貴、いいじゃあないか。

これが東京の姿だ。

TOKYOの夢をみた。そして、東京の現実を知った。

だから、路上というこの場から、生きていくぜ、いいだろう。

遊心

狭間に生きる

この大都会 東京で

ススキの穂を 見た

排気ガスを まきちらす

車道の中の 緑地帯に

数十本のススキが 束になって

五、六ヶ所に分け 植えられている

人々の目には どう映って

いるのだろう

私は大変複雑な 気分になる

微笑ましくもあり 佻びしくも成り

大いに気持ちちが 揺れる

丈は思つたより 高いが

精気と云うものが 感じられない

穂は頭を垂れ 色艶も悪い

ススキは 排気ガスを

吸いながら 一生懸命

生き様と 頑張っている

人間と云う 愚か者が造つた

最悪の 環境の中で

汚され様が 犯され様が

生への望を 捨て切れず

必死に生き 続けている

バカな人間達は 平和と云う

大義名分を 嵩にして

世界のあちこちで 今も戦を行っている

化学等と云う 不用の物で

地球上の生命は 破壊されて行く

・人間どもそんなに死にたくば死ね

だが、他の生命ある物を道連れにするな

お前達にそんな権利はない

ぼくは、アリです。
外に出る時
回りをキョロ、キョロと
ながめます。

ある日の事

ぼくがごはんの
したくをしようと
ぼくが視たら

巨大な羽根を

もっているヤツが

路辺に

ころがっていました。

こいつは、よいごはんに
なるぞ…と

「現の時代」

(アリの目)

秋戸 空

こいつは、昆虫という
ものらしいのです。
人間種は、そのように
よんでるみたい…

ぼくらにとっては、

(人間種って

自分かってで…

害虫みたいなの

もんだ…な)

そいつが何故

死んだのか

路辺で

あっち、こっちと

風に吹かれ

けとばされ

はねていたんでしょう

でもアリであるぼくは

その時、そいつを

ごはんにしようと

引っぱって

こようとしているのに

この人間種の
ために、その
外に出てゆく
チャンスが
まったくないので

いつてしまったと

思ったら、今度は

こっちからも

やってくるのです。

今、

うかうかと

でていったら

ぼくも

きつと

ふみつぶされて

しまう

私のボーイ捨て戦争

瘡師辰雄

平成十一年二月十五日、連絡会の皆様のジンリョクで生活保護を受け桜寮に入れていただきました。

三月始めごろからハローワークに通いました。求人票十三枚にて清掃会社(三月十九日)面接し出直し、三月二十三日九時〜十時連絡まち。九時四十五分電話有り仕事決定、うれしくてナミダが出た。

九年六月イライ、ホームレスしていましたが本当にうれしかった。桜寮長のリカイで高田馬場に通いだす。マンション四階建、午前十時〜十二時。パート。

約二カ月マンション内外部、道路、ゴミ、タバコ、拾いまくった。トナリに福祉専門学校が有ります。私の作業時間十〜十二時。学生の休み時間と

からあいます。一階シキチ内及道路にボーイ捨てが四月始めからひどくなる。一階入口に防水カベが有り、厚さ十センチ、ヨコ三M、高さ一・五Mにホームレスの人が夜シキチ内にネテ、朝ダンボールを防水カベのスキマに入れていきます。そのダンボールに学生がボーイ捨てする。

非常にキケンです。又、トナリの税理士さん、玄関前そして九階建屋上に昇る。マンション前、紙会社の前、生命会社、所カマワズ、弁当、タバコ、空カンをボイステする。学校は四月から全校キンエンになり、キツエン、休ケイ室をヘイサした。

学生達の行場がなくなり、町内所かまわずボーイ捨てヒンパンになった。約二カ月ガマンしたが、私も(アツツン)、学校にノリコム。職員二名出てきた。防火責任者も出てきた。拾えばいいだろうといつてきた。

ダンボール箱の所にもボーイ捨て、私拾えば、ことがカイケツスルノカとせまる。その間、五月末より(千駄ヶ谷荘にうつりました)八月始めまでタバコ一本でもアルト学校受付にオシカケカナラズ拾わせた。私もシツコイ(自分の仕事かふえるから)近所の年よりにきくと学生のマナーがワルスギル。頭にキテイタノデ課長を呼出した。

二名出てきた。
当日雨、雨の中、テツテイテキ、タバコ、ゴミ、そ

の他拾わせた。私も拾った。夏休みに入った。ポイ捨てがなくなり、学生もイナイのでサビシカッタ。

学校当局、ゼンシヨします、会ギしてます、問題にしています、ノラリ、クラリ、三カ月つづく、私ときどきケイサツ、消防呼ぶとオドカス、八月スギ、職員とアイサツかわす、職員さん、九月始めキツエン所作るといつてきた。

九月十三日二学期始まる。学校の前、ベンチ3、ハイザラ2。私ボイステ戦争一時カッタト思った。十七日やはり学生中々やる、私の月水金、パートをおぼえ、火・木、に植木の中その他見えないう所にポイ捨てする。

私も負けていない。職員を呼びつけ拾わせ清掃させる。いっおわるかわからない。

マンシヨンの清掃がツツクカギリがんばる。しかし相手が福祉行政、カンゴ、カイゴを学び、卒業後現場に出てきたら、私七十才カタキトラレル。チヨット心配になってきた。やりすぎたかな？

現在、私、六〇才

高血圧、胃病、腰、カタ、左耳（ナンチヨウ）イロイロ有りますが、十年〜十五年ぐらい働くつもりです。

ホームレス第四句集

「ホームレス牢人」

1300円

大石 太 著

犬吠えて眠り眼で直立す

あぶれ寝の尻の穴まで西日さす

陰に雪積むボチのたくましさ

とくと生仏のおらを拝みなせえ

蝸虫や死んでも脱げぬ罪の殻

(株) 創造書房

〒一〇二一〇〇九三

千代田区平河町二の六の三

都道府県会館内

TEL 〇三―三二六三―〇〇八七

FAX 〇三―三二六四―八四〇一

振替口座 〇〇―一五〇―五―三三七四五

己の人間は何か？

年72才にして想ふ

戦ひにやぶれ

大正・昭和・平成の今日まで生き

誰がために生きる

現世の今日、明日は？

明日の人の事とか？ 自分の事か？

人情紙風せんの世にキリストを信じると言ふのか？

ほとけにすがれと言ふの？

教へて下さい

野宿の夜は

心淋しさにほほ流れる涙

何がため

人情、紙風船の

如き人ノ世に

一椀の食事に集ひ来る

仲間の喜びに

今日の私の

炊出の価値を知る



づうづうしい奴
頭は悪いし 金もない
だけど、いつでもほがらかさ
づうづうしいやつと人は言ふが
すべて此の世は押一ツ
一押し 二押し 三押し
やればなんとかなるさ
やれやれ やってみな



新宿松っちゃん

一時 (時間)

田代 猛

人生には停年がある。でも人の心や生きかたには、決して停年等あり得ないと考える。夕暮時、石神井公園の池の辺に佇む。孤独感が心の奥底に滲う。何物かがじんと込みあげてくる。(泣きなさい。泣きなさい。声を上げて、泣きなさい。) そんな夕暮時、一時の心の想いです。いつも、いつも、ひとりぼっちの人生だったのに。一羽鳩君が水を求めて僕の側に飛んで来た。鳩君よ、君も淋しいのかい。僕も淋しいのだ。しばらく僕の側に居て下さいよ。そうだ、昔一茶さんと云ふ俳人が(やれ打つな 蠅が手をする足をする) そんな句を作ったことを思い出す。蠅にも心があり、生命があるからと思ひ、一茶さんは自らの打つ手を躊躇したのであらうか。そしてそんな句が出来上がったのだらうか。現実の政治・行政には、そんなあたたかい人間性(ヒューマニズム)のある政治・行政が行はれてゐるのだらうか。言葉の美しいことは厭と云ふほど聞きました。反面、何か知らねども権力と云ふ力を表に出して高圧的な言葉もこれ又、厭と云ふほど聞きました。池の水を眺めながらそんな心の感傷論に落ちいります。或る人は政治や行政に期待するなど、僕に云ふ。そして己の意志に期待せよと僕に云ふ。でも一人の力個人の意志では、此の厳しい現実の重圧は苦しい。苦し過ぎる。一本の矢は折れやすいが、二本、三本となると折れにくいと云ふ諺がある。底辺に生きる人々にも生きる希望、生きる力は人一倍あるのだ。踏まれても踏まれても野道の草木は生きてゐるのだ。そして小さな美しい花を咲かせてゐるのだ。僕もつまずき通し弱い人間なのだ。時折そんな心の思いが一つの空虚感となつて心を支配する。鳩君よ、もう帰るのかい。元気で頑張つて下さいよね。僕の一時の間を難う。淋しい一羽の鳩君と淋しい一人の老人のほんの一時でしたね。さようなら。元気で明日、又、大空を飛び廻つて下さいよね。そんな或る日の夕暮れ時の池の辺の一時でした。

我が道と新宿連絡会

風来坊

途・路・道 いづれもをつければ、みちと読む。途 死
して渡るは三途の川。

路、「ろ」とも読む。街路、路上、人生に己の悲哀と人情味
を痛感した路上生活の日々。かつて巡り会ったのは、新宿
連絡会の支援者と知り合い、あの当時私が歩んで来た路と
終止符を打ち、現在人間として人としての正道に歩くに
至った。生活保護を受けてアパートにて、進歩の道、和菜
の道へと心懸けるのが我が歩むべき道と足りる。この道へ
と導いてくれたのが支援者の力があつたからである。ア
パートに居住する様になってから足かけ五年、その間二度
に渡って又もとの振出しの路に逆戻り寸前の時期があつた。
その時も、支援者の厚意に依り正道に舞ひ戻る事が出来た。
私は現在、腰痛と疲労で体力消耗との診断され毎日点滴
と注射で病院に通っている。ベットに横臥し小雨がそぼ降
る夕暮れ時、姫りんごの色づいてるのを眺め乍ら、只茫
然と過去を思想する。新宿の仲間の苦勞が手に取る様に私
の心が痛く波を打つ。雨が激しく、降って来た。私はこう
叫びたい。

「仲間よ、今の自分から堂々たる出発を願う壁につき当た
る程、悩みがある程、境涯は広がる。逆境に負けるな。誇に、
冬来たらば春遠からじ」と、自己の悩みや苦しさを克服し
夢を追って欲しい。夢は必ず実現する。偉そうな事を書い
てはいるが、私も以前はホームレス「路上生活者」なのだ。

小雨降る 姫りんごの実 もやに霞んで我思う

さまよい歩く 過去の哀れさ

BEER & CAFE BERG

この券をお持ちの方(9方)に限り

ビール ¥300 +
A) 激辛の サラシ ¥390 (ポテト or ザー・クラウト (¥400の替り))
B) 激辛の サラシ ¥300

100円引きサービス
有効期間 1999年12月まで

新宿MYCITY B1
Am 7:00 ~ PM 12:00

※当雑誌をお持ちの方には、サービス有り!

俺達の生き様

遊心

今日も又、新しい仲間がダンボールを抱えてやって来た。数名の者が新入を迎える為に小銭を出しあって酒盛を始める。名前も歳も過去も 問わない。そして未来も、俺達には今があるのみ、それでよいのだ。身も心も貧しくとも、今をおもしろおかしく生きる、それが俺達のすべてだ。明日はいらない。神があたえてくれた生命、今日だけを精一杯生きる、それが社会の秩序から弾き出された俺達の生き様なのだ。だが決して卑下する事はない。通り過ぎて行く人々からさげすみの眼を向けられ、俺達をさけて行く人々に過去を知ってもらおうとも思わない。同情されたくもない。俺達は俺達にだけしか通用しない信念を持って今日のみ生きて行く。あたえられた恩恵は素直に受け入れ、それ以上の事を決して求めず、二、三日食べ物のあり付けずとも、それも俺達にあたえられた定め

のひとつと受けて、生命つきれば、それで全てが無に帰す。それが俺達に神があたえてくれし思し召しなのだ。さあ酒盛も終わり間近。ほろ酔いに身をまかせねむりに付こう。我が身に明日と云う日が訪れる事を願って。

・ダンボールを広げて寝る事は悪だろうか、罪だろうか。決して善ではないだろう。しかし、身をさらけ出しても俺達にも生きる権利はあるはずだ。

見渡せば どこ迄続く野分跡

気が付けば 語り掛ける 秋燈に

夜なべ手や 渋茶を飲んで 励みをり

秋簾 久しき客に 揺らぎをり

ホームレス 露の身横臥 儘ならず

僕も
 昔も
 や
 心
 見
 我

光

人
 打
 受
 願
 心

光

「謹」
つつしみ

新宿の
孤老翁

阿夫利山 ぶりききみれば あかねぐも 富士の高嶺に 伴と寄り添う

先日、相州、阿夫利山（大山）に登りました。

ケーブルカーはほんの途中までで、あとは人工の加えられていない山路を二時間も歩く苦行でした。そんな私をほっとさせてくれたのは「すんだ声でなくうぐいす」が迎えてくれたことです。梅桜と云う名の山桜が楚々として風にゆれていました。

谷や峰を歩いていると不意に日常にない厳かさや身に謹（慎）しみをおぼえる瞬間がある。あの一瞬は虚空の厳々しさにちがいない。虚空とは数学上のゼロと同義語で、一切を存在させない。一切の存在を邪魔しない。それは、人智のおよばざるものへの「つつしみ」。神社・仏閣の杜に身を置いた時、そこが霊域だと意識するしなにかかわらず、ごく自然に靈威を感じるのは何故か？ 人が山登りお寺参りをするのは何故か？ それ事態、何も見えない、聞こえない、何も云ってくれない、与えてくれない。しかし、人は、その我が身の五感に何かを感じる。電車のなかや、猥雑喧嘩な街なかの生活の場では感じられない何かを。身がひきしまると云うか、厳かにして、冒しがたい深らかさを感じる。それが人智を越えたものに対する「つつしみ」である。現代人は（私も含めて）人に対して、自然（山・川・海）に対して、神に対しても、つつしみを忘れていのではないだろうか。

十月十一日、高尾山に登る計画がある。

あの薬王院と自然林の中に佇んだ時、同行の人々が何か感じるだろうか。下山後皆さんで話し合ってみたいと思う。

高尾山 薬王院に せみしぐれ

たこ杉や はちまきしめて 踊りやんせ

巡回にて

宗春

私も野宿者の一人として仲間と共にホームレスボランティアとして動いています。何も出来ないかも知れないがガンバッテいる者です。いつも昼ともなく夜も仲間の事が気になって巡回するようにしています。

其の中である人が言っていました。

病気になるって働けず、福祉の世話で病院へ入院し、今は病気がすっかり良くなり働いていますと、喜んでいました。働ける喜び、それは人生にとって最大なるものだ。私はそれを聞いて、自分の事のようにうれしく思います。がしかし、まだまだ多くの仲間が色々な面でなやみ、働きたくとも仕事が出来ないと、この不況をくやんでいることはたしかです。仲間の皆んな、野宿しながらもいつもそのような考えでいることを実際に身にうけている私です。私は私なりに仲間のことを心から信じてこの活動をしながら、自分を見いだしたいと思っています。

急募 越冬ボランティア!

今年も仲間のいのちを仲間を守る冬の取り組みが行なわれます。

新宿越冬セミナー99「路上に生きる人々と共に」

11月14日(日)午後2時より信濃町区民福祉会館2階集会所

99-00新宿越年越冬突入集会

11月28日(日)午後6時より中央公園ポケットパーク

*越冬ボランティア希望の方は上記以外でも毎週日曜午後6時から新宿中央公園ポケットパークの炊き出しにお越し下さい。

求む! 越冬物資・資金

米、毛布、ホカロン、衣類、医薬品、活動資金

が不足しております。ご家庭で不要になりました物資があれば下記住所にお送り下さい。新宿・池袋・全部の越冬活動に大事に使わせて頂きます。また、活動資金カンパは下記の郵便振替口座で受け付けております。

新宿・池袋越年越冬の取り組み

12月23日越年越冬支援連帯集会

午後1時日本村教会館(予定)

越年闘争(連日炊事、パトロールなど)

12月26日から1月4日朝まで

中央公園ポケットパーク

新宿連絡会

東京都台東区日本堤1-25-11 連絡協議会館4F

03-3818-3450 FAX 03-3378-8761

郵便振替口座00170-1-723682「新宿連絡会」

羅針盤のなき人たち

私は先年まで都庁関係の人達と会う機会があり、ここのK・H・Iさん達を「まれに見る現代の天使」とよんで来ました。だつて身を投げだしてまでこの様な運動をする人達ってあまり居ないでしょうし、それも一、二年ではなく、もう何年も続いています。「継続こそ力なり」と言いますが、その根気には感服しています。大きい事から、細部の事まで、何年も、同じ様にすると言う事は並大抵の事ではありません。壮大な夢をもつこの人達だからこそ、やれているのだと思います。寒中の夜中のパトロール、雪の夕方のKさんの中央公園へのパトロールを私は知っています。世間の人達はホームレスと言うと、冷たい目をむけますが、この人たちが居てくれる事で、ホームレスがどんなに幸せで居られるか、心の支えになつているか量りしれないと思います。もし、この人達が居なかつたなら、砂漠に一人投げだされた感じで皆がキット居たことでしょう。

この人達の志が天に通じ、キット善い結果が出る事を祈りたいと思います。改めてエールをお送りします。最近では、国が5億円出し、23区が相談し、器を造ると言う所まで来ています。この人達の運動が区から都、都から国まで動かした成果だと思ひ、とてもうれしく思っています。

最近、トルコやギリシャ、台湾と、続いて大きな地震が起きた。お偉いお方が、大地をゆすりにゆすぶられて
いる感じた。いますべては近代化されてはいるが、いまの時代は、かつてのノアの箱船の時代と同じであると
思う。

「善になれ、急げよ、善になれ」

とお偉いお方が叫んでおられる気がする。

心せよ、童子どうじの様な純粹で、想いやりのある心になれかし、
心善きものは残され、心悪しきものは淘汰される

ノアの時代がそうであったように、残された人々はこれからの時代の種人になるのだと言う。

「天地創造」と言う映画があり、ソロモン王と、その妻が出てくる。妻は子供ができず、そば女が身ごもり、妻はつらい想いをする。そこへ三人の肉体化した神様が現れ、「もうすぐ子供が授かる」と告げて去る。本当年を経た妻からは子供が生れ、そば女は出されてしまう。神様がその妻を哀れみ、子供を授けて下さったのである。妻にはエバー・ガードナー、神様の一人にはピーター・オツールがなっている。

長いマントを頭からかぶり、杖を持ち背が高くチョット神秘的で本当の神様のようであった。ピーター・オツールの若い時の軽妙なタッチの役を見たが、彼はやはり、40才前後の「アラビアのロレンス」「天地創造」などのやや風格の出してきた頃の重みのある彼の方が素敵だと思う。

その映画の中の世相が、いまとそっくりなのである。性的にも乱れ、男が髪を染め、化粧をし、白いアイラインを入れ、イヤリングをしていた。先頃、女高生が白いアイラインをふとく入れ、私を見たその顔が、あまりに映画で見た顔とそっくりだったので、ギョツとしてしまった。

大神は三人の神に乱れた世相をみて歩かせた。そこに大地震が起こる。二人の善良な人間がいて、神は「上の方に駆け助けろ」と指示す。けれど、「決して振り返ってはいけない」とも言う。けれど、その一人は振り返ってしまう。すると、その瞬間、人の形をしたまま、もう石になっていた。

神の愛は忍耐強く、大らかではあるが、厳しきはものすごく厳しいということが、そこに描かれている。だから神の賞、罰ははつきりしているのである。善き想い、善き行いをしている人には良き結果(神の救いと、報い)が出るが、その反対の人には・・・判るでしょう?

私達は、人に良きことをする為に、生れさせられているのです。極言すると、救う為に・・・だから、人の物を盗ってはいけません。相手の人の悲しみ、困る事をまず考えてみるのです。自分も盗られたら、ものすごく悲しい筈です。

(水すまし)

ききがき

子供の頃の ふるさとの思い出

続Bさんのお話

私は戦争の末期一九四三年（昭和一八年）に秋田の内陸盆地で生まれました。父は役所勤めで、他に綿打機を買ってワタの打ち直しをしたり、近所の人に蚕を飼わせて養蚕もしていました。小さいながらも田畑があり、桑も植えていました。暮らしは決して楽ではなく、母は裁縫を教えていました。私の背が少し低いのは栄養不足のせいだと思っています。母は私が一歳のときに亡くなったので、母の記憶はありません。写真が一枚残っていて、それで母を知っています。紫のはかまを着ている写真です。当時四歳だった姉は養子に出されました。今、東京に住んでいると聞いていますが、会ったことはありません。その後父は再婚し、三歳差の弟と六歳差の妹がいます。養母は特別厳しかったというわけではありませんが、きょうだいの中ではよく怒られました。そりや、やっぱりそうでしょう。一九歳のとき東京の店を飛び出して秋田の実家に帰ったときには、養母に「妹を中学にあげなきゃねえ」

と言われ、やさしかった父も、居ていい、とは言ってくれず、再び東京に戻ったのですが、私と同じように東京へ集団就職した弟はしばらくして秋田に戻り、運転免許をとってタクシীর運転手として住み続けてしまいました。私の帰った時期が悪かったのだとは思っているのですが。

当時弟や妹とは仲が良く、いつも一緒に遊びました。妹をおぶうのは私の仕事で、近所の友達とかくれんぼなどをして遊ぶときもおぶって遊びました。おぶうと温かいのでよく眠れるのです。

小学生の頃は、かくれんぼの他にボール投げや近くの山へのカブトムシ採りに行つてよく遊びました。特に好きだったのはスケートで、路上に積もった雪をローラーで押し潰すと、寒さで氷のようになる。そこをスケートで滑るのです。学校へもスケートをはいて通いました。

冬のもう一つの楽しみはかまくらです。まず屋根の雪を降ろし、その雪でかまくらを造る。近所の友達と一緒に造り、できあがると中にわらを敷いてござをのせる。そして火鉢を持ちこんで、もちを焼いてみんなで食べるのです。大人は大人でかまくらをつくり、中で酒を飲んでいました。父はとてもやさしい人で、私は父が大好きでした。お父さん子で、よく遊びに連れて行ってもらいました。行き先は近所の川で、夜、二人でナマズを釣りに行くのです。普通でも四〇センチ、大きいものだと七〇センチのナマズが釣れました。おみおつけに入れるといいだしが出てとてもうまく、養母は学校の弁当に身をよく入れてくれました。家の近くを流れているとてもきれいな小川では、友達とよく遊びました。石の下には、コチのような形をしたカジカがいるので、あみをかけて獲ります。あぶったり煮たりして食べ、香があつてとてもおいしい魚です。ヤツメウナギもたくさんいて、小魚をすくうあみで底の泥ごとごっそりとすくって獲ります。

家の敷地内にはどこの農家もしているように、子をとるための牝ウシ一頭と、乳のためのヤギ二頭、毛皮のためのウサギが十羽前後いました。ヤギの肉は何度か食べた記憶がありますが、ウサギの肉は別の家で一度ごち走になったくらいで、家で食べた記憶はありません。

小学校が休みのときは、海にほど近い実母の山形の実家へ遊びに行くことがあります。ゼンマイやワラビがよく採れるところで、ゼンマイと豆腐・ジャガイモの煮物は本当においしかったです。プリやハタハタも食べました。プリは煮て食べた。忘れられない味です。その後東京で働いているときに、一度山形の母の実家を訪ねたけど、記憶が不確かで、散々歩いたあげく探せませんでした。

小学六年のとき、仙台へ修学旅行に行き、青葉城などを見てまわりました。今でもその時のことが懐しくて、ごくまれに帰郷するとき、仙台経由で街の景色を眺めてから帰ります。たまには、こういうのもいいのです。

勉強はあまり好きではありませんが、中学のとき卓球部に入部し、楽しく過ごしました。今履いているつっかけは足に合わず痛いのですが、卓球のときにはく柔らかないスポンジの靴があればいいなと思うことがあります。

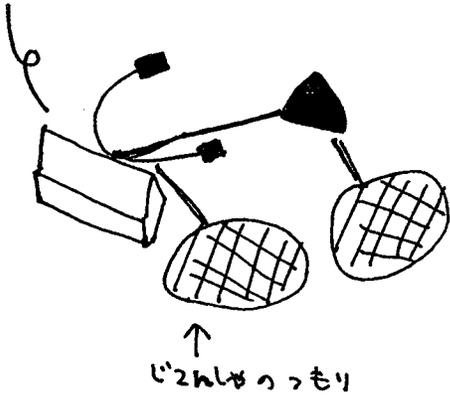
中学を卒業するとすぐに夜汽車に乗って東京へ就職をしました。

石山ひさ子

おくふちあははニキリンイモ
 ちたし

ニキリンイモ
 ちたし
 ちたし

ニキリンイモ
 シンクイのニキリン
 ちたし



ちたしの
 ちたし



チンクイの
 ちたし



いちじくの
 ちたし

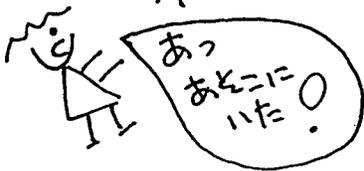
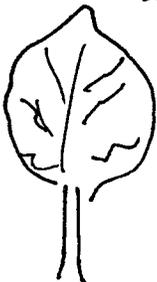


ちたし

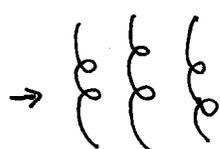
ちたし

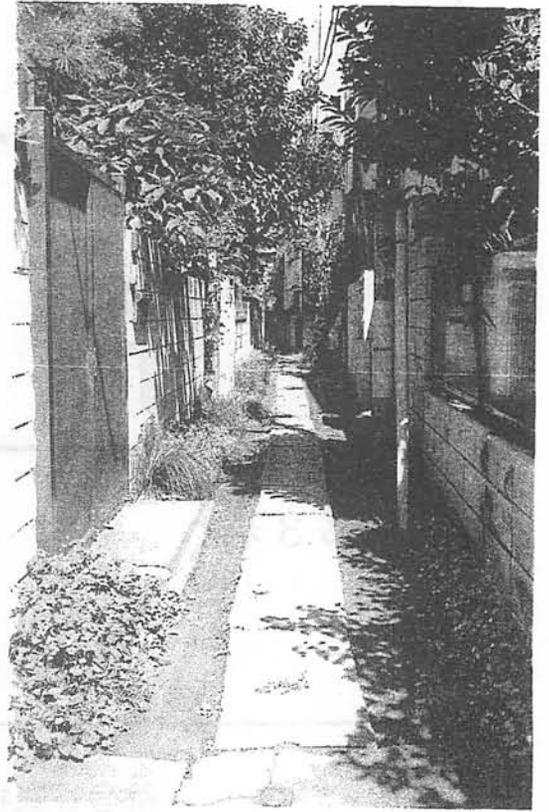
ちたし

ちたし...



ちたし
 ちたし



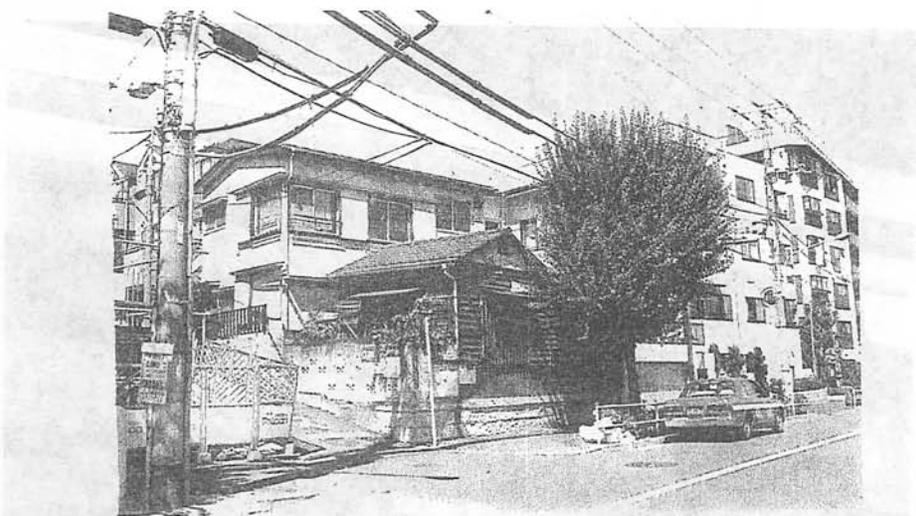


誰でもひとりぼっちは嫌なものである。

それが人生の峠を過ぎ、知るべき世間を知り、見るべき世間を見、あとは朽ち果てて行くだけの時間を数える身にとっては、尚更ひとりぼっちは嫌なものである。

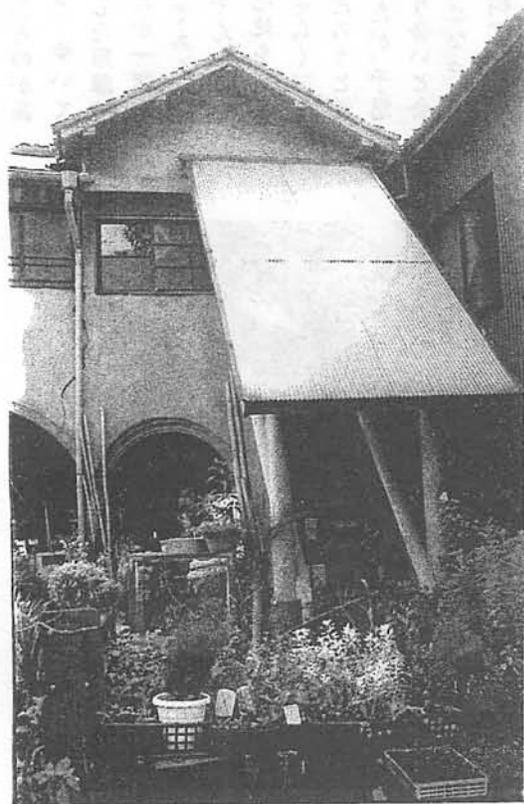
都市の雑踏から離れられない者がいる。進行中の病に侵され安アパートに閉じこもる位なら、当てどもなく人が行き交う雑踏の中、じっとそれを見上げ、酒に酔いつぶれていた方が良いというおっちゃんがいる。路上に座っている限り、人の流れは途絶えない。その流れの中に昔一緒に飯場で働いた仲間、昔一緒に野宿をした仲間、昔一緒に病院に運ばれた仲間がいるかも知れない。そして、それらの旧知の友人達と出会う確立はこの街にいる限り極めて高い。貧しさはどこかで共鳴しながら同じ境遇の人々を集わせる。貧しい人々を排除しない空間こそ、雑然とした雑踏の中だから。もちろん、だからと言って、何かを当てにしている訳ではない。誰に会いたいという訳でもない。ただ、寂しいからそこにいる。ただ、ひとりが嫌いだからそこにいる。

どうも最近、こういう「困った」おっちゃんらと時間を過ごすことが多くなった。しかも、その気持ちに共感するだけに更に「困った」事である。確かに新宿の街をふらふらと歩いたり、座り込んでいれば、旧知のおっちゃんらと会わないことはない。せっかく会って知らんふりをする事も出来ずに会釈をしたり、話をしたり、酒を飲んだり、まあ自分も同じことをやっているのである。



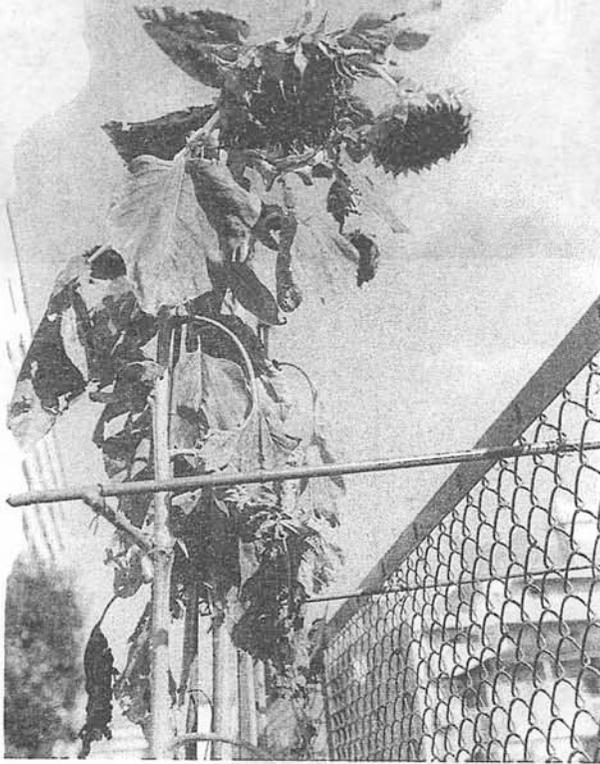
その新宿から地続きの北のはずれにあるのが高田馬場である。歩いて行ってもたいした距離ではない。たかだか一駅か二駅分の距離である。この街もおっちゃんらのシマであり、住宅地を選んでも歩いてもおそらく旧知の誰かに会うだろうと覚悟を決めていたが、予想通り三人の知り合いと会話を交わす事となった。住宅街は住宅街で生活保護を取った人々が古いアパートなどで暮らしているのである。おそらくひとりが嫌いなおっちゃんらはアパートでじっとしている事などないのである。何か用事がなくとも、自然に街の方に足が向かう。「困った」ものだが、そんな偶然の出会いもまた楽しいものである。





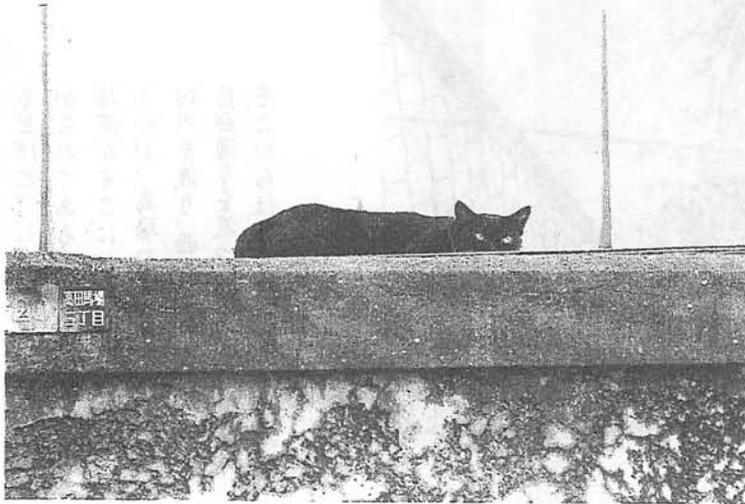
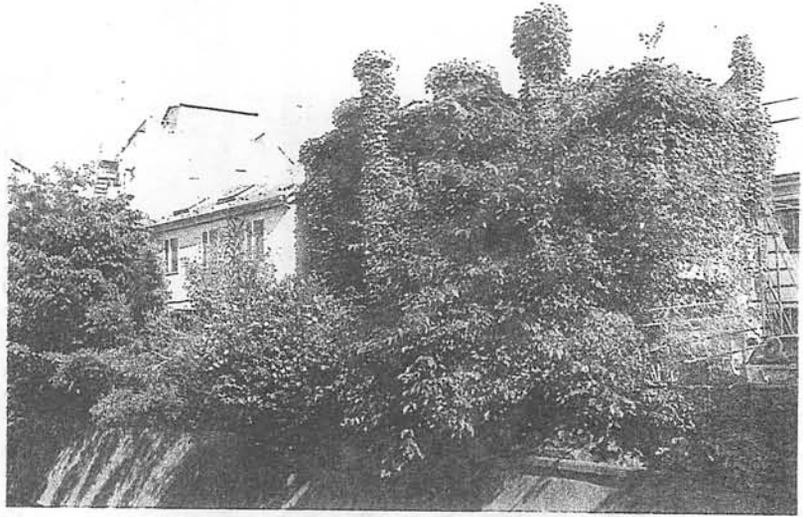
しかし、高田馬場駅の周辺の不思議さは一体どこから醸し出されているのだろうか？都内有数の大学や予備校、専門学校密集地から吐き出される前途を約束された若者の活気と、寄せ場の不景気から吐き出された野宿するおっちゃん達の寝姿。戸山口と早稲田口との明確な対象は、戦後形成されたこの街に集う、それぞれの人生の明暗を暗示しているかのようなのである。しかし、この街が渋谷や原宿のように若者のパワーにまると占領されなかったのも、その暗部の方が支配的な街であった、と、言うより、戦後の庶民生活の重さが地に根付いてしまったからなのであろう。

西戸山公園の野球場の向こうに
聳えるこの街唯一のバブルの象徴、
タワーホームズの超高層マンションが、いかにもこの街に相応しくな
いかは、その周辺を歩き回るだけ
で歴然としてくる。試しに新宿駅
から池袋に向けて山の手線の外側



をとぼとぼと歩いて見るとよく分
かるのであるが、景色が断絶する
場所がそこにはある。その境とい
うのが、馬場の駅のすぐ近く、神
田川を渡り、西武新宿線を跨ぎ、新
目白通りを渡った場所からである。
そこからは登り坂が続き、地形的

に馬場、百人町、大久保界隈は谷底の
街であることがようやく判明する。下
落合、目白界隈は言わずと知れた清楚
な高級住宅街、その高地の頂きには学
習院大学と来る。古今東西悲しいかな
庶民の集住地は谷底である。この谷底
にあった陸軍施設が戦後貧しい人々の
被災地、集住地に自然となり、今は順
次取り壊しにあっている都営戸山団地
の姿となる。馬場は戦後の被災民が空
息するかのように集中して作られた歴史
を持つ。戦後復興のため、また被災民
の生活のため、失業対策や日雇労働の
ための職業安定所が作られ、その周辺
には社会政策的な施設が今でもちらり
ほらりと散在する。庶民、なかなしく
その中でも底辺の人々は、この街にし
がみつみなから生活を維持し、生き抜
いて来た。馬場の駅周辺を歩くだけで
も迷子になってしまう程の入り組んだ
路地の数々は、区画整理などという綺
麗事とは縁遠いこの街の歴史を今でも
知らしめる。すなわち、ここには庶民
がぐちゃっと居座り、しがみついでい
たのである。



こういふ地権が複雑にからみあつて
 いる街は開發という魔の手になかなか
 引っかけ難いようだ。お役所も、不
 動産業者も音をあげてしまうのであろ
 う。運よくうまくいったタワーズホー
 ムズが場違いな印象を受けるのもそん
 な理由からだ。おかげで我々は戦後民
 衆史をこの街から実感こめて学ぶ事が
 出来るし、野宿のおっちゃんらも他の
 街よりは安心して夜を向かえることが
 出来る。なにせ新宿のような根柢さは
 ないものの、良い意味で雑然としてい
 る街だから。しかも庶民生活の息遣い
 が聞こえる街だからである。

今回の路上ぶらり散歩は、高田馬場
 四丁目周辺を歩き、下町風情が残る上
 落合を抜け、今やどこでも見られない
 であろう、朽ち果てた木造長屋スタイ
 ルの上高田都営住宅を発見し、妙正寺
 川に沿って中井駅、下落合駅へと逆戻
 りし、高田馬場駅に戻るコースを辿つ
 た。最近どうもレトロ建物マニアのよ
 うになってしまった二人だが、我らと
 趣向の会う景色がどこへ行ってもある
 はあるは。いちいち場所を説明するま
 でもなく、こんな光景がこの近辺には

いくらでも残っているのである。これが本当に新宿の北の方かい？と、新宿と言えば超高層ビルだけを連想する人々に聞かれそうだが、これも紛れもなく新宿の景色の一つなのである。現像された写真を見てどれも意外に緑の草木が多いのは驚いた。歩いている時にはあまり気付かなかつたのは、それだけ街並に同化していたからか。武蔵野の面影はこうやって古い建物と一緒に残っている。中には緑の草木が建物を飲み込んでしまっているものもある。それは、取ってつけたような都市計画の緑地帯や都市公園のワザとらしきとは違う草ぼうぼうの荒れた緑なのである。自然も見えてくれだけの都市開発に反対しているようで、人の手が届かない場所においては、もはや制限なしのパワーを見せつける。もっとも、こんな新宿の一面も、歴史を順に追って行きさえすれば、別段不思議がる事もない。かつての新宿一帯などは武蔵野の東のほずれの片田舎。それを都市が膨脹して人々がわっと押し寄せ、こんなにしてしまっただけの話である。草木の抵抗、古い家並の抵抗、貧しい人々の抵抗、そんなものを押し退けて、ようやくつかかなビルは聳え立つのである。最先端の技術で成り立つ物を推進する人々は、億マン

ションを手軽に購入できるような人々の側である。そんな現代社会の抵抗の歴史は、その街並を歩くだけで手に取るように分かる。すなわち、まだまだ、ここは山手線の駅前にしては頑張っている方である。代々木がやられ、恵比寿もやられ、大崎もやられ、とパブル期に大きく変貌した山手線駅が多い中で馬場駅前はターミナル駅でありながらも、新宿の場末としての姿をしっかりと残している。

緑も建物も町並みも駅前も人々も、この街は雑然としている。しかし、それが新宿谷底地帯共通の底力であるということ、今回改めて気付かされた。古きも新しさも、希望も絶望も、すべてを背負い込みながら、それでいて、それが別段不思議だとも思わない寛容さと言うか無神経さ。何とも訳の分からないこの街々に人々が惹かれるのも無理はない。だって人生なんて言うものはある意味ではそんなものだからである。一人の辛さを紛らわせられる街、旧知の友人と街中で偶然出会える街、路上で酒を酌み交わせる街、金持ちも貧乏人も受け入れてくれるオールマイティの街、現実も仮想現実も兼ね備わった街、焼け野原の谷底から復興したこの街から続く新宿谷底地帯の戦後は、今も

この雑然とした力と共に息づいている。確かに貧しい人々が住める場所は少なくなった。パブルと共に地価も上がり、家賃もあがった。しかし、それでも、野宿しながらでもこの街に残る人々がいる。それは、経済的な理由以外の何かがこの街には備わっているからなのだろう。都心部にはない庶民の生活の息吹がここにはある。人口の街にはない泣き笑いの人々の歴史がここにはある。ここで働いた。ここで飲みあった。ここで助けあった。人々の記憶に残る街というのは人々を自然に引き寄せる。

彼岸の日の風の中、妙正寺川のひまわりが枯れようとしていた。しかし、支えられながらも懸命に立っている。そんな姿が実に立派に見えた。

ひとりぼっちが嫌な人は自分を優しく包んでくれそうな場所にもいるのだ。そして、そうやって、気付いてくれる人を待っているのである。

露宿映画案内

「パリ・テキサス」

監督・ヴィム ヴェンダース

一九八四年 西ドイツ・フランス合作

人生をやり直せるなら、あのときをやり直したい。思い出すと胸を掻きむしりたくなるような、そんなつらい記憶がある。癒えることのない記憶から少しでも逃れるため、時にひとは酒を求め、他の場所を求めてさまよふのだから。

映画の筋

4年前に妻と息子を残して失踪し、死んだと思っていた兄トラヴィスがテキサスで発見され、弟が迎えに行く。トラヴィスは一言も喋らず、食事もしない。車で旅をしてい

るうちに、喋り、食べるようになるが、過去の記憶は曖昧のままである。

トラヴィスはロサンゼルスにある弟の家で8才になる息子と再会する。彼がいなくなったあと妻も去り、弟夫婦が息子を育てていた。自分と妻、息子と弟夫婦の映る、8ミリフィルム過去の映像を見て、トラヴィスは記憶を甦らせていく。やりなおしたいと願う、息子と2人で、いなくなった妻を探しにいくが……。

『パリ・テキサス』は、『ベルリン 天使の詩』と並び、監督ヴィム・ヴェンダースの代表作で、いわゆる「ロード・ムービー」と呼ばれるタイプの作品である。

テキサスの砂漠のさびれ、乾ききった風景とライ・クローダーによるギターの音色が主人公の孤独と重なり、やるせない空気が漂う。息子ハンターの可愛らしさ、妻ジェーン（ナスターシャ・キンスキー）の美しさもまた、見るものを切なくさせる。

ヴェンダースは、彼の映像そのものへの思いを、作品にいかすことがある。『さすらい』という映画では、そもそも主人公がドイツの地方をトレーラーで巡回する映写技師だ。この作品の中では、弟が撮ったホーム・ムービーによる8ミ

り映像の場面に反映されている。そこに映されているのは、主人公の家族のある1日の様子だ。素人が撮った粗いその映像は、残酷なまでのリアリティを持って、幸せに満ちた失われた過去を切り取ってくる。

息子にとっては、映像の中の幼い自分と両親の幸せな姿が、再び現れた父親への親しみとなる。父親にとつては、もう一度3人でやり直したいという思いになる。そしてトラヴィスは息子と2人で妻を探す旅に出る。

トラヴィスは妻を探し出す。しかし、はつきりと甦った自分の記憶があるがゆえ、やり直すことを不可能とする。彼は妻を愛していた。彼女に向かって、「想像を絶して愛していた。」と告げる。それは再び会ったときも変わらなかっただろう。愛の深さ、記憶の重さが、やり直そうとする彼の夢を砕く。

最後に彼は、息子が待っていることを妻に告げ、2人を残し、また去っていく。今度はさまざまな記憶を抱えたまま。

ヴェンタースはこの作品で、1984年カンヌ国際映画祭のグランプリを受賞した。

(飯田 基晴)

路上文芸総合雑誌「露宿」は、
以下の場所でお買い求めになれます。

・模索舎

東京都新宿区新宿2-4-9 (新宿通り「かつ井・牛井どんどん」右折)
TEL/FAX 03-3352-3557

・TACO ché

東京都中野区中野5-52-15 中野ブロードウェイ3F
TEL 03-5343-3010 FAX 03-5343-4010

・野宿者・人権資料センター

東京都新宿区大京町3 新大京マンション304号
TEL/FAX 03-3226-6845

「露宿」を販売していただけるお店、スペースを大募集しています。
詳細は裏表紙の連絡先まで。

『夜を賭けて』

梁石日 著
幻冬舎文庫

在日朝鮮人の作家に梁石日という人物がいる。もちろん面識もないが、どこかでホームレス運動と共通する問題意識を持っているのではないかと、とても近親感を抱いている。

梁石日自身、大阪生まれの在日二世で事業に失敗し多額の負債を抱えて東京に出奔した生い立ちをもつ。新宿の中央公園で野宿していた時、新聞の募集広告でタクシー運転手の仕事を見つけて、その後10年以上東京でタクシード

ライバーを続けていたという。

時代が違えこそすれ、中央公園という今我々が運動する同じ場所から、人生の新たな一步を踏み出したという点で、下層に息づく生命の息吹を共有していると感じている。特にひどく感銘を受けたものに『夜を賭けて』という小説がある。文庫版でも出版されているので、読んでみたらいかがだろうか。

私がこの本を手にとったのは、1.

24強制排除事件裁判で東京拘置所の独居房に囚われていた時であった。リクエストしたわけでもないし、在日朝鮮人の小説は難解なものという先入観を持っていた私は、最後の最後に読み始めた。

時は戦後10年以上も経った大阪の在日朝鮮人部落での物語だ。当時、大阪にあった巨大な兵器工場は、空爆を受け廃墟のままほったらかしにされていた。猫間川と寝屋川の合流する運河は、川底からメタンガスが噴き出る死の川として、日本人は近づかなかった。

ここに在日朝鮮人たちがバラックを建て、住み着くようになった。この不法占拠地でのような手段で生活の糧をつかみ取っていったのかを、生き生きと描き切った物語だ。ある日、部落の婆さんが兵器工場の廃墟に入り込み、拳大の鉄くずを拾ってきた。これがとてももなく高価な金属で、法外な値段がついた。ここから話は始まる。

翌日、大挙した朝鮮人たちは徒党を組んで兵器工場の跡地に入っていく。ところが当然ながら旨い話は転がっていない。「ああ、もう二度と来るか」と口々に話して引上げたものの、その翌日にはまた大挙して工場跡地に侵入していく。当然ながら管理者は立ち入り禁止の措置を取るが、日が暮れてから入り真つ暗闇の中で朝まで土を掘り起こし、出てきた鉄類をとにかく運び出す。鉄を運ぶ肩の肉は裂けてめり込み、衣類が肌にくびりつくほどの重労働をフル回転し、陸地が寸断されたら船を使って鉄を運ぶなどの創意工夫を凝らして鉄掘りは続けられた。最後には警察が本格的な摘発に乗り出し、弾圧をかくぐり抵抗を続ける彼らは、アメリカ大陸で闘いを続けるアパッチ族になぞらえて、大阪のアパッチ族と呼ばれた。

苦境の中で、その厳しさを乗り越えるため、同じ状況に置かれている者と共に力を合わせるといふのは、先祖代々から伝わってきた人間の生

きる知恵なのだろう。苦境の深さが深いほど、力を広く大きくしていかななくてはならないし、社会の下層・底辺にいたるほど、共同して事に当たる必要性は増していく。しかし一方で、下層社会には聖人君子ばかりがいるわけではなく、個人どうしのいがみ合いや利己主義、足の引つ張り合いがどこにももある。こうした真実の姿をつつみ隠さずに盛り込んでいくことに、私は大きな共感を覚える。必要なのは、強いられた共通の目的（この場合には在日朝鮮人が日本人社会の中で生きていくこと）に向かって力を合わせることに、その共同作業（私たちにとっては運動）の中で、欠陥・弱点・誤りを克服していくことではないだろうか。私のこうした能書きを歴史的事実として表したのが『夜を賭けて』であると感じている。

梁石日の書物はこの他にも一通り読んだが、反骨精神と抵抗闘争がテーマになっているのは他に『Z（ゼット）』があるだけで、その他の小説は酒とセックスと暴力と事業の失敗と放蕩

と、人生の裏街道を歩む男の混沌とした物語で、うんざりするものばかりだ。この混沌の頂点が、梁石日の父親の人生を描いた『血と骨』で、これもかこれでもかと暴虐の限りを尽くす生き様とその人間関係の修羅場をここまであけすけに表現されると、はつきり言って二度と読みたくない。

人間には良い面もあれば悪い面もある。良い面ばかりを過大に評価し、悪い面を包み隠していれば、いつか行きづまる。

私自身下層に生を受け、下層労働者として生き聞っている。下層にしかない力強さとそのパワーを、様々なテーマで表現し続けること、梁石日と我々の運動とはどこかで接点があるに違いない。

本田庄次

はり師いが丸の 肝心かなめ

はり師 いが丸

人とのつきあいの中で、ひとりの人の手に見とれている自分に気づくと、私はその人に興味を持ったことを認識する。死んだ祖母が大きくて皺をたくさん刻んだ手をしていたせいだろうか。顔はその人の齢や経験を刻むものであるが、手も然り、と思っている。

手は、その人の人生を映す。自分の手を使って物を作り出す仕事や、肉体労働をしてきた人の手は、おしなべて厚い。風雨にさらされることが多ければ、当然手はそれを表す。

女性であれば、指環やマニキュアの似合う、白くて細い手指が美しいのかもしれない。私の手は決してきれいとは言えない。それでも、小娘の頃には長い人生を歩んできた年配の方に「いいわね、きれいな手で」と言われたことがあった。それは私の心の中では「いいわね、苦勞を知らなくて」と響き、思い上がりの激しい年頃だったせいも、未熟な自分を言い当てられたようで、恥ずかしさと口惜しきで体が熱くなったのを覚えている。

私が何故鍼灸師になったのかというと、第一に、鍼と消毒用アルコールさえあればどんな地域でも治療ができるという身軽さにひかれたからだったが、人の手が生み出す治療であることも理由のひとつだった。手で何かを作り出すことのできる人の仲間に入りたかったのだ。

現在、漸く鍼灸治療に携わるようにはなったものの、ちょっとは厚みのある手になったかななどと、時折自分の手を見つめている暇のある私が、まだまだ未熟者であることは言うまでもない。

きて、風も水も冷たい季節になってきました。寒くなると手足のひび割れに悩む方が増えてきます。クリームなどで潤いを与えてあげるのが一般的ですが、その辺に生えているアロエをちぎって手にすりこんでいる、と言っていた仲間の知恵に感心したことがあります。試してみてもは如何でしょうか。

『おさるのまいにち』 講談社

いとう ひろし 作・絵

絵本なんて子どもの読むもの、と決めつけているあなたに、私から「バーカ!」という言葉を送りたい。絵本こそ、老若男女を問わず誰もが読める愛すべき大衆紙なのだから。

ぼくは、おさるです。みなみのしまに、すんでいます。ぼくのすむしまは、とてもちいさいけれど、もりがあります。やまもあります。かわもあります。ぼくらはこのしまで、なかよくくらしています。

こうして始まる猿たちの毎日。朝起きてから寝るまでの行動は、いつも同じ。おしっこをして、ご飯を食べて、遊んで……。そんなある日、海亀のおじいさんが島にたどりつく。年に数回海を渡って現れるおじいさんは、外の世界を知らせてくれる貴重な存在。おじいさんの話に驚きながらも、想像力をふくらませ楽しむ猿たち。けれど別れの時間がくるのは早い。再び大海原へ向かうおじいさんを心配しながらも送り出す。そしてまた、いつもと同じ日が始まる。

さてさて、この本は昨秋、私の友人が誕生日にプレゼントしてくれたものである。読後「かわいい」という程度の感想しか持たなかったが、日が経つごとに愛着が湧いてきた。それは20代の頃日常からの脱出を図り、あらゆることを手を出し、それでも物足りぬ日々を送っていたのが、いつの間にか30代になり非日常ばかりを追い求めても何も得るものがないと気づき、日常を見つめ直したからだろう。平凡な毎日の中に楽しみを見出した時、初めて人は幸せになれるのではないか？



R

O

j

u

k

u

露宿と世の中をつなげてみませんか？

「露宿」を置いて下さるお店・販売店を募集中です。現在、路上生活者と支援者の手売りに頼るしかない小雑誌。紙面にあふれる思いを、一人でも多くの人に届けたく、日夜奮闘中。喫茶店・本屋・スペース等お持ちで「露宿」を置いて下さるといふ方、ぜひご連絡を！知人・友人の分もまとめ買いされるといふ方も大歓迎！まとめ買いの方は、お安くなります。5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円です。よろしく願い致します。

あなたを広告致します。当雑誌では広告大募集！半ページ5000円、1ページ1万円（値下げ交渉可）。イケテルとれんでい雑誌ゆえ、載った次の日からもうあなたは人気者！！電話がじゃんじゃん鳴り響く事、間違いなし。壮大なるジャパニーズドリームを叶える第一歩に、まずは下記までご連絡を！！

投稿も大募集中です。下記の住所への郵送、編集者への手渡しのほか、「露宿ペン倶楽部専用ファックス」がごございます。「露宿」など通信物の注文・原稿送付・広告申込・ご意見・ご質問・近況報告など何でもご利用下さい。親切丁寧、連日24時間受付中！

FAX 03-3378-8761

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供しています。一人でも多くの路上生活者の方に手渡したい為、発行部数が増えれば増える程、赤字になるという宿命です。繰り返しで、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

◆定期購読一年間5000円で大募集中◆

◆購読費・カンバ送り先◆

郵便振替口座：
00170-1-723682
「新宿連絡会」

編集後記

風が秋を運んできた。日一日と、空の色が変わっていく。風のおいで思い起こされる記憶があると聞く。この季節に家を出た私は、秋の晴れた青い空を見ると、わけもなく気持ちが弾み、胸がしめつけられる。

編集：露宿ペン倶楽部
発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）
連絡先：☎111 東京都台東区日本堤
1-25-11 山谷労働者福祉会館気付
：☎ 090-3818-3450
：FAX 03-3378-8761
メール：inaba@jca.apc.org